

文化財学習会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 開園 70 周年を迎える玉藻公園を訪ねる

講 師 大嶋 和則（高松市文化財専門員）

日 時 令和 7 年 5 月 5 日(月・祝)

共 催

高松市文化財保護協会

高松市教育委員会

目次

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
時鐘楼と報時鐘	北の丸月見櫓・水手御門・渡櫓	東の丸	大手	艮櫓	桜御門	披雲閣と披雲閣庭園	鉄門	鞘橋	刻印石	地久櫓	本丸の文字刻印石材	天守	中野武宮銅像	高松城跡の歴史・概要
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
15	14	13	12	12	11	10	9	8	8	7	6	4	3	2

説明は高松城跡のパンフレットと併用して行います。
本資料は、パンフレットに記載のないものや、普段見ることができないものなどを中心に掲載しています。

1 高松城の歴史・概要

高松城周辺は、中世までは「野原」のほらという地名で、寺院や香西氏配下の小領主の居館が所在した港町でした。天正十五年（一五八七）に讃岐一国を与えられた生駒親正いこまちはまさは、翌年に地名を「高松」と改め、高松城の築城を開始しました。北は瀬戸内海に面した海城で、内堀・中堀・外堀の三重の堀で守られています。近年の発掘調査では、高松城の完成は二代一正かずまさ、あるいは三代正俊まさとしの頃ではないかと考えられています。

親正は慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の戦いで西軍につきましたが、子の一正が東軍についたことから、讃岐十七万一八〇〇石余りは一正に安堵あんどされることになりました。生駒氏の治世は四代続きましたが、四代高俊たかとしは幼くして藩主になったことから、生駒騒動と呼ばれる家臣団同士の争いを招き、寛永十七年（一六四〇）に領地を没収され、堪忍料として出羽国矢島一万石が与えられました。

その後、寛永十九年（一六四二）に松平頼重よりしげに東讃十二万石が与えられました。高松城に入った頼重は寛永二十一年（一六四四）から城の修築を開始し、寛文十年（一六七〇）に天守の改築、翌年から東の丸、北の丸の新造などを行いました。城の改修は二代頼常よりつねに引き継がれ、月見櫓つきみやぐらや 艫うし櫓などの建築、大手を南側から東側に移動させ、三の丸に御を建築しました。その後、城の姿は大きく改変することなく、十一代にわたって高松松平家の居城でしたが、慶応四年（一八六八）に土佐藩主体の官軍に開城しました。

明治期には外堀は埋め立てられ、外曲輪の市街化が進むとともに、城の北側も高松築港による埋め立てが行われ、海城の雰囲気は薄れました。また、中堀より内側の大部分は兵部省（のち陸軍省）の所管となり、建物の多くは取り壊され、明治十七年（一八八四）には天守も解体されました。明治二十三年（一八九〇）に高松松平家に払下げとなり、大正六年（一九一七）に三の丸に現在の披雲閣ひうんかくが建築されました。戦後、一時進駐軍に接收された時期もありますが、昭和二十九年（一九五四）に高松市の所有となり、翌三十年（一九五五）に国史跡として指定され、同年に玉藻公園として開園しました。なお、江戸時代から現存する良櫓りょうろ・月見櫓つきみろ・水手御門わたり・渡櫓わたりの四棟と、大正時代に建築された披雲閣（旧高松松平家別邸）の本館・本館付倉庫・倉庫の三棟が重要文化財に指定され、その庭園である披雲閣庭園が名勝に指定されています。

2 中野武宮銅像

たけなか

中野武宮（通称…ぶえい）は、嘉永元年（一八四八）に高松藩勘定奉行の長男として生まれ、幕末には藩士となりました。その後、明治から大正時代にかけては、官吏・政治家・実業家として活躍した人物です。明治二十年（一八八七）、愛媛県会議員となると、香川県の分県運動に力を注ぎ、翌二十一年（一八八八）に香川県が置県されたことから、香川県独立の父とも呼ばれます。

また、二十三年（一八九〇）、帝国議会開設に伴い第一回衆議院議員総選挙では、香川県第一区の高松市から出馬して衆議院議員に選出され、七期務めるほか、後に東京市からも選出されるなど、政界においても活躍しました。

さらに、実業家としても活躍し、県内においては香川新報（四国新聞の前身）の創刊のほか、第百十四国立銀行、讃岐鉄道株式会社（JR四国の前身）の役員就任、高松電灯株式会社（四国電力の前身）や高松商業会議所（商工会議所の前身）などの設立や運営を支援するなど、地元へ貢献しました。

高松松平家の相談役や第十二代当主松平頼壽よりながの後見人として、高松松平家と深い関りがあったことから、公益財団法人松平公益会を母体とした中野武宮顕彰会によって、令和六年（二〇二四）に銅像が設置されたものです。

3 天守

生駒期の天守については、外観や内部の構造について不明ですが、絵図や古文書によると三重だったとされます。この天守を改築したのが松平頼重です。改築された天守は三重四階＋地下一階で、寛文十年（一六七〇）に

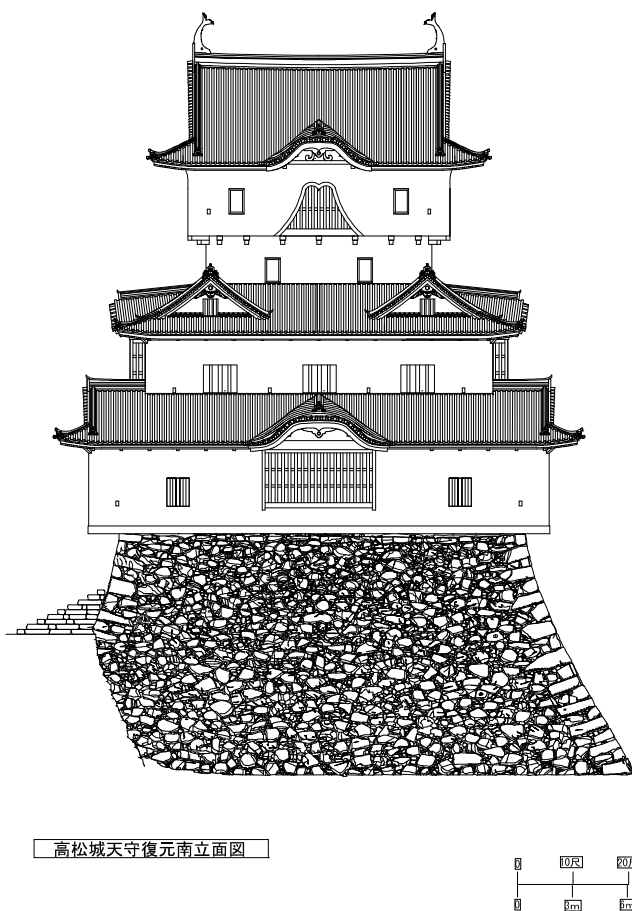


写真 1 中野武宮銅像

完成しています。最上階が下の階より張り出した南蛮造り（唐造り）で、さらに地上一階部分が石垣より張り出した構造となっていました。明治十七年（一八八四）に老朽化を理由に取り壊されました。

天守を支える天守台石垣は、城内の石垣の中で最も崩落の危険度が高いことが判明したため、平成十七年（二〇〇五）度から解体修理事業に着手し、二十五年（二〇一三）度に完成しました。十八年（二〇〇六）度を実施した発掘調査では、天守の地下一階を検出し、床面では礎石を五十八個検出し、入口の六個を除く五十二個の礎石は「田」の字状に並んでいました。南東隅の礎石上面には南北方向に土台の設置位置を示すと考えられる約三十センチの直線が刻まれており、また、北西部の礎石にも土台痕跡と考えられる変色や破損が発見されました。

この線刻と土台痕跡の間は約十一・八メートルで、六尺五寸（百九十七センチ）を一間とすると六間であり、『小神野筆帖』おがのひつちょうに記載された地下一階の規模「東西六間南北五間」の記載を裏付けることとなりました。また、「高十七間半、内石垣四間」とあるため、穴蔵部分を除く地上部分の高さは十三間半であることが分かり、高さは約二十六・六メートルであったこと



高松城天守復元南立面図

図1 高松城天守復元図（南面）

もわかります。ちなみに、石垣は水面から約十三・一メートルあり、屋根の上部に約二メートルのじやちほじ鰐を加えると四十メートルを超える高さとなります。

解体に際しては、二十センチ以上の石材に番号をつけ、積直し時には元の位置に戻しています。石材の数は約九千個になります。割れて使えなくなった石材は、新しい石材に交換していますが、その割合は約十二パーセントです。解体時の発掘調査及び工学的調査により、①天守台の周辺地盤が締まりのない砂礫層、②盛土も砂で粘着力に欠ける、③海水の干満により盛土が吸出されている、④天端から雨水が浸透している、という四つの破損原因が判明しました。これに対して、①松杭を打ち込み捨石を行う、②石灰を混ぜて粘着力を高める、③碎石層を設け吸出しを防止する、④二和土の叩き仕上げで遮水する、といった伝統的な工法で補強しています。

4 本丸の文字刻印石材

本丸南東隅階段の側壁最上段の石材に文字が刻まれた石材があります。二十三センチ角、残存する長さ七十八センチの直方体の花崗岩です。上面には上端に「界」、その下部に「嘉元二年十月八日」、さらにその下部に「夜叉女やしゃめ」と刻まれています。文面や文字の配列から、嘉元二年（一三〇四）十月八日に「夜叉女」という人が建立した石塔と考えられます。

高松城築城（改修）時には、鎌倉時代末期の石塔までも利用していたことが判明しました。周辺に中世の寺院や集落の存在を示唆するもので、数少ない中世の文字資料が得られたことも貴重な発見です。

5 地久櫓 ちきゅうやぐら

本丸の南西隅で、櫓の建築年は不明ですが、生駒家時代から存在した櫓で、十七世紀中頃の様子を描いたとされる『高松城下図屏風』には二重の櫓として描かれています。石垣の崩壊の危険性が高かったため、平成十年（一九九八）度から一時中断期間を挟んで二十六年（二〇一四）度まで石垣解体修理を行いました。発掘調査では東西四・八〇五・二メートル、南北四・三メートル、深さ一・八メートルの穴蔵が発見されました。櫓台は石垣の積直し痕跡から何度かの改修を受けていることがわかります。

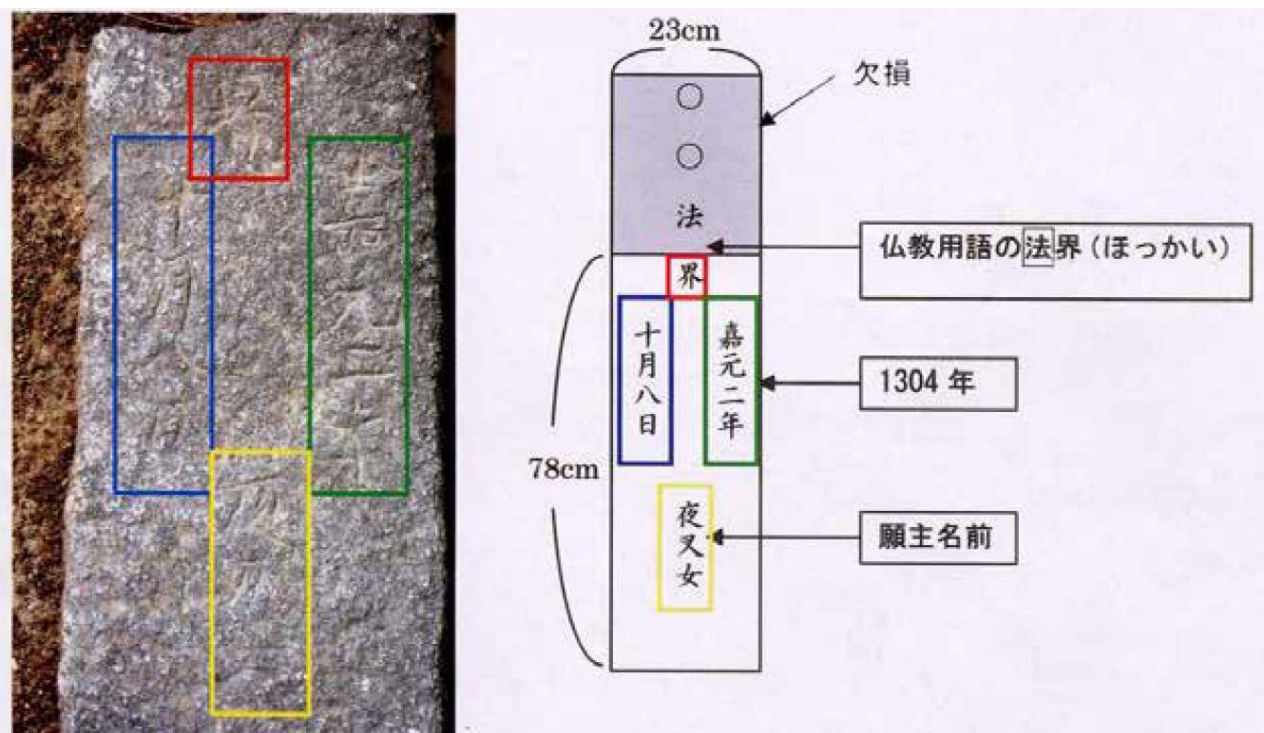


図2 文字刻印石材

6 刻印石

本丸虎口には○、×、分銅形、長方形などさまざまな形の刻印石を見ることができます。このような刻印は地こぐち久櫓、矩櫓かねといった本丸に多く見られるほか、渡櫓、旧大手門ますがた枳形などに主に分布しています。単純な記号であることから、何の印なのかは分かっていますが、多くは石垣の隅角部ぐみかくの算木積みの石材に見られます。城内には百個余りの刻印石があります。

7 鞘橋さやばし

本丸は内堀に囲まれており、本丸と二の丸を唯一つないでいる鞘橋を渡らなければ入ることができません。現在には屋根付きの橋ですが、当初は屋根のない構造で、「らんかん橋」と呼ばれていました。文政六年（一八一三）の絵図『讃岐国高松城石垣破損堀浚之覚』さぬきのくにたかまつじょういしがきはそんなほりさらえのおぼえ（臼杵市教育委員会所蔵）には屋根が描かれていることから、詳細な時期は不明ですが、江戸時代の中頃に屋根付きの橋になったと考えられます。屋根が無い構造の方が本丸に迫った敵に鉄砲や矢を射るためにはいいのですが、太平の世になり防御の必要性が薄れ、橋の老朽化を防ぐ目的で屋根が付けられたと考えられます

8 鉄門

くろがねもん

二の丸の入口は東西両方にありましたが、二の丸の正門である東側の鉄門は櫓門で、鉄板を張った門でした。錆が石垣に付着しており、その名残を見ることができます。強風による松の揺れにより石垣の一部が崩れたことから、平成十六・十七年（二〇〇四・〇五）度に石垣の解体修理を行いました。石垣解体に伴う発掘調査では、石垣内部の盛土から十七世紀中頃の土器が出土し、豊島石の切石で作られた東西約二・三メートル、南北約一・三メートル、深さ約八十センチの床下収納状の遺構が発見されました。文献史料によると寛文二年（一六六二）に北西隅の櫓に落雷があり、鉄門付近まで類焼し武具などが焼けたという記載があり、この頃に石垣を修築し、その際に作られたと考えられます。

このほか、二の丸には西側に西の丸から入る^{はねばしぐち} 刎橋口門、北西隅に^{れん} 簾櫓、北東隅に^ぶ 武櫓、鉄門の南側に黒櫓、南西隅に^{ふみ} 文櫓、^{ゆみだめ} 刎橋口の南に^{ゆみだめ} 弼櫓がありました。



写真2 鉄門床下収納状遺構

9 ひうんかく 披雲閣と披雲閣庭園

御殿については、築城時には本丸、その後本丸と二の丸の二箇所にありました。松平頼重・頼常よりつねの大改修に伴い、元禄十三年（一七〇〇）に三の丸に御殿が新築され、披雲閣と名付けられました。

明治になり、披雲閣は取り壊されましたが、大正三〇六年（一九一四〜一七）に高松松平家第十二代当主頼壽伯爵によって三の丸に別邸として江戸時代の御殿と同名の披雲閣が建てられました。接客、居住、家政等の機能をもつ各棟を渡り廊下でつないでおり、百四十二畳の大書院をはじめ、洋風の蘇鉄そてつの間などがあります。この二部屋は当初和小屋で設計されていましたが、梁間が広いことからトラス構造に変更するなど西洋技術も取入れられています。現在は貸館として利用されており、茶会・コンサート・結婚式など多彩な催し物が開催され、市民が気軽に利用できます

平成二十四年（二〇一二）に本館、本館付倉庫、倉庫の三棟が重要文化財に指定されました。また、このほか裏門一棟、袖塀そでべい二棟、井戸屋形一棟、四阿あずまや二棟が附指定されています。

同時に整備された披雲閣庭園は、東京の庭師 大胡勘蔵によって作庭されました。披雲閣の北側は北東隅から南西隅に向けて延長百五十メートルほどの枯川かれかわが適度に曲線を描くように設けられています。枯川の中ほど北

側に二つの頂からなる築山つきやまがありますが、『旧高松御城全図』に描かれており、同所は石材や植栽の状況も周囲とは異なると評価できることから、江戸時代の御殿に伴う庭園を残している可能性が考えられます。

庭園の重要な箇所には、雪見燈籠ゆきみとうろうや春日燈籠など様々な形状と大きさの石造物が配されています。特に枯川の中ほどに架かる庵治石製の石橋や大書院の北側に置かれた銀閣寺型手水鉢ちようすばちは例を見ない大型の石造物です。飛石とびいしや沓脱石くつぬぎとともに必要以上の大きさを誇る石造物・景石けいせきは本庭園の特徴の一つでもあります。このほか特筆すべきものとして、昭和天皇・香淳皇后の御手植松も見られます。

旧大名家が近代になって自城に作庭した例は、全国的にも少なく、その代表的事例とも言え、国の名勝に指定されています。

10 桜御門さくらごもん

三の丸の入口に当たる門です。昭和十八年（一九四三）に国宝（現在の重要文化財）指定を受けた月見櫓などと一緒に指定申請を行っており、翌年には指定が決定していましたが、二十年（一九四五）七月四日の高松空襲により焼失しました。石垣には被熱痕が残っています。



写真3 焼失前の桜御門

桜御門は、城内の失われた建造物の中で最も資料が残り、復元した際に、大手の旭門から入り、櫓門である桜御門をくぐり、御殿である披雲閣に至るといった往時の登城の雰囲気を再現でき、復元の効果も高いことから、発掘調査、史料調査を経て令和四年（二〇二二）六月に復元が完成しました。江戸時代には桜の紋章などの幔幕を張っていたことも記録されており、その景観についても復元しています。

11

良櫓 うしとらやぐら

延宝五年（一六七七）に東の丸の北東隅に建築された櫓です。その名称は高松城の丑寅（北東）の方角にあたることに由来しています。三重三階の総塗籠で、初重には二重の屋根を貫く千鳥破風が見られ、城外側の隅には袴型の石落としが設けられています。昭和二十二年（一九四七）に国宝（現在は重要文化財）に指定され、昭和四十二年（一九六七）に現在地（太鼓櫓台）へ移築されました。

12

大手 おおて

大手は生駒期には南側にありましたが、寛文十一年（一六七二）から始まった大規模な改修により現在の位置に移されました。なお、現在の駐車場は、かつて「大下馬」と呼ばれ、馬を降りる場所でした。

現在の旭橋^{あさひ}は明治時代に石製に架け替えられたものですが、絵図でも門に対して斜めに描かれており、当初から斜めであることがうかがえます。このように石垣に対して斜めに架ける橋を筋交橋^{すじかい}と呼びます。敵の直進を防ぐとともに、城内から敵の側面に矢を射掛けることができるよう工夫されています。旭門は文献史料によると江戸時代には東御門と呼ばれていたようです。扉を開いた際に雨で扉がぬれないような屋根が付いてあり、このような形式の門を高麗門^{こうらい}と呼びます。

門をくぐると来訪者を威圧するかのような切石の石垣による枳形^{けいけい}があります。南側に折れた所にはかつて櫓門があり、この枳形内に入ったら周囲の石垣上からの集中砲火を受ける構造になっていました。また、枳形の北側には石垣をトンネル状に構築した埋門^{うめい}があります。櫓門を攻撃する敵を背後から攻撃するための門であったと考えられます。

13 東の丸

松平頼重は寛文十年（一六七〇）に天守を改築し、翌十一年（一六七二）から北の丸、東の丸といった新たな曲輪^{くるわ}を造るなど、大規模な改修や拡張を行っています。現在の県民ホールから県立ミュージアム付近がその東の



写真4 埋門

丸の跡地です。生駒家時代は重臣の屋敷が中堀沿いにあり、その東側には町人街（いおのたな＝魚屋）が存在していました。これらを城外に移動させ、堀を掘削するとともに、海側を拡張して新たに東の丸が造られました。その北半分は米蔵（食糧貯蔵施設）、南半分は作事方（城内の建築工事関係）の施設がありました。これまでの発掘調査で、米蔵や作事舎の礎石などが見つかっています。また、県民ホールの北と東に石垣が現存しており、史跡に指定されています。県立ミュージアムにもこれに続く石垣がありますが、中段に目地が見られ、下部は発掘調査で検出した石垣を復元したもので、上部は史跡の石垣に高さを合わせて再現したものです。

また、これまで発掘調査で、長櫓台から北東に延びる突堤や、東の丸築造前の下層石垣が検出されており、このうち石垣については県民ホールの地下に保存されており、見学可能です。

14 北の丸月見櫓・水手御門・渡櫓

北の丸は、東の丸と同じ時期に海を埋め立てて築造された曲輪です。曲輪には現存し、重要文化財である月見櫓、水手御門、渡櫓などが整備されました。月見櫓は延宝四年（一六七六）に上棟された建物です。三重三階で、南側に続櫓と呼ばれる櫓が付属しています。昭和二十二年（一九四七）に水手御門、渡櫓とともに国宝（現在の重要文化財）に指定されました。

月見櫓は着見（＝着くのを見る）から名付けられたと言われています。また、頼重は西国大名の監視役を命じられたと言われており、月見櫓からは、瀬戸内海を航行する船の状況が一望できることから、海上の監視塔としての役割も考えられます。

水手御門は海に面した門で、本柱の後に控柱をつけた薬医門やくいと呼ばれる形式の門です。藩主はこの門で小舟に乗り、沖に停泊している御座船に乗換え、参勤交代などに出向きました。

渡櫓は平櫓で、櫓台の城内側の石垣には、生駒時代の石垣と松平頼重が新たに築造した石垣の間に縦目地があり、拡張した部分がはつきりとわかります。櫓の最大の特徴は内壁で、城外側は柱や貫ぬきを塗籠めた大壁、城内側は柱や貫を露出させた真壁、生駒時代の石垣上は、柱は見えますが漆喰を波のように盛り上げ貫を隠す波型真壁と呼ばれる壁になっており、一棟で三種の壁を見ることができます。

15 時鐘楼と報時鐘

じしやうろう

ほうじしやう

承応二年（一六五三）に松平頼重が城下の時報のため鐘の鑄造を命じるとともに、高松城南西の外堀土手（現在の高松北警察署付近）に鐘楼しやうろうを建てました。その後、一番丁（現在の錦町一丁目）に鐘が移されました。明治三十三年（一九〇〇）に四番丁尋常小学校校庭（現在の四番丁スクエア）に鐘が移され、引き続き、市民に時を

知らせていましたが、昭和三年（一九二八）一月に市庁舎にサイレンが設置されると、その役割を終えました。八年（一九三三）に四番丁尋常小学校講堂改築に伴い、報時鐘は高松松平家に戻され、高松城跡の披雲閣庭園に置かれていました。二十九年（一九五四）に高松城跡が市の所有となり、鐘も高松市の所有となりました。五十五年（一九八〇）の市制施行九十周年記念として、高松信用金庫、高松屋島ライオンズクラブから寄附があり、鐘楼を再建することになり、五十八年（一九八三）に現在の位置に復興されました。



写真5 報時鐘

＊参考文献

- 大嶋和則二〇一三『ふるさと探訪 平成二十五年六月 城跡めぐり②～高松城～』
高松市二〇一四『史跡高松城跡』
高松市・高松市教育委員会二〇〇七『鉄門石垣調査・保存整備工事報告書』
高松市・高松市教育委員会二〇一二『史跡高松城跡（天守台）―発掘調査編―』
高松市・高松市教育委員会二〇一三『史跡高松城跡（天守台）―石垣解体修理編―』

高松市・高松市教育委員会二〇一六『史跡高松城跡（地久櫓台石垣整備）』

高松市・高松市教育委員会二〇二二『史跡高松城跡（桜御門石垣整備）』

高松市・高松市教育委員会二〇二二『史跡高松城跡（桜御門復元整備工事）』

高松市文化財課高松城（玉藻公園）ホームページ

<https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kurashi/shisetsu/park/tamamo/index.html>

高松市教育委員会二〇〇六『むかしの高松 第18号 高松城を発掘する！ その1』

高松市教育委員会二〇〇六『むかしの高松 第19号 高松城を発掘する！ その2』

高松市教育委員会二〇〇八『むかしの高松 第20号 高松城を発掘する！ その3』

高松市教育委員会二〇一二『むかしの高松 第25号 高松城天守台を修理する』

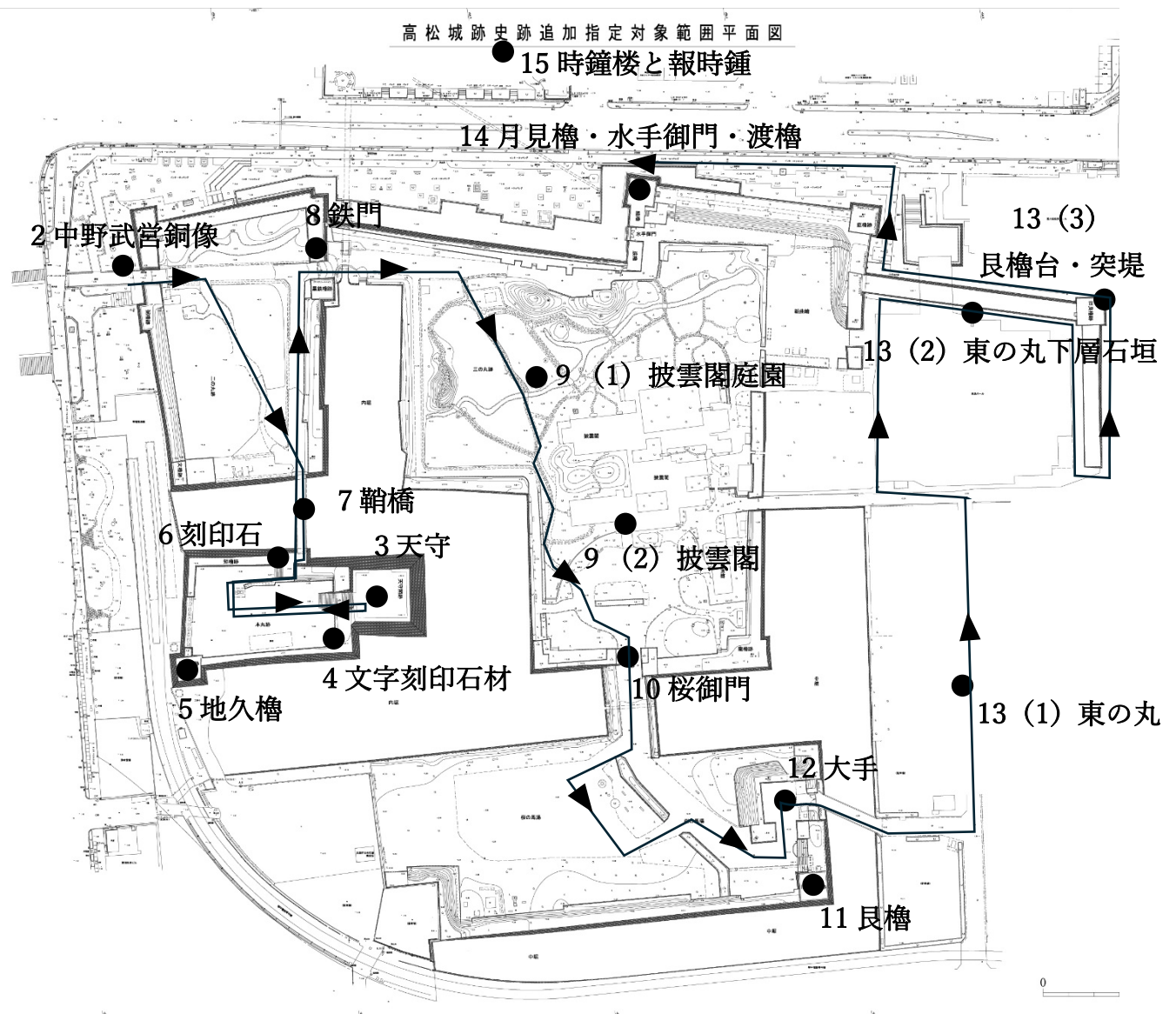


図4 探訪地位置図